

(発行所) 応用生態工学会事務局 〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5第7麹町ビル25号室

TEL:03-5216-8401 FAX:03-5216-8520E-mail: see@blue.ocn.ne.jp HP:http://www.ecesj.com/

(発行者) 応用生態工学会(編集責任者:幹事長 角野康郎,事務局長 西 浩司)

## Contents

- 1 はじめに
- 2 「応用生態工学研究会」から「応用生態工学会」へ
- 3 学術研究団体登録と会誌「応用生態工学」の今後
- 4 第6回大会報告
  - 1) 開催概要
  - 2) 第6回大会を終えて
  - 3) ポスター賞決まる!
  - 4) 奨励研究と研究発表を終えて
- 5 幹事会・理事会報告
- 6 会誌編集委員会報告
- 7 地域だより
  - 1) 応用生態工学・札幌から
  - 2) 東京だより - 第4回東京湾海洋環境シンポジウム開催 -
- 8 いろいろなニュース
  - 1) 韓国 日本交流報告(2002年8月)
  - 2) フォーラムの開催(in松江)
  - 3) 北陸初開催! 現地ワークショップ「北陸の水辺を考える」
  - 4) 長良川特集を読むシンポジウム開催!
  - 5) 国際トビケラ目シンポジウム詳報
  - 6) 国際集会の案内
  - 7) 研究公募のお知らせ
- 9 事務局から

## 1 はじめに

第6回大会(10月5日(土)、10月6日(日))の2日間に渡り科学技術館サイエンスホールで開催)で開かれました第6回総会において、会の名称を「応用生態工学研究会」から「**応用生態工学会**」と改めることが決議されました。また、第19期学術研究団体登録申請が受理されたことが報告されました。

## 2 「応用生態工学研究会」から「応用生態工学会」へ

前事務局長 熊野 可文  
(株式会社建設技術研究所国土文化研究所)

2002年10月5日(土)、科学技術館サイエンスホールで開催された応用生態工学研究会の第6回総会において、その名称を「応用生態工学会」とすることが決められました。これは、同年9月13日付で日本学術会議法の「学術研究団体」として登録されたことから第19回理事会で審議し、第6回総会で採決され決定したものです。

平成14年9月13日付けで日本学術会議会員推薦委員会から送付された「第19期日本学術会議会員の選出に係わる学術研究団体の登録申請の結果について(通知)」という文書(総会資料のとおりです)には、「本会における審査の結果、貴団体を、日本学術会議法(昭和23年法律第121号)第18条第3項に基づき登録したので、学術研究団体の登録に関する規則(昭和59年日本学術会議規則第1号)第9条の規定により通知します。」とあります。

登録事項のうち、関連研究連絡委員会名次のとおりでした。

土木工学 関連研究連絡委員会  
生態・環境生物学 関連研究連絡委員会

今年5月28日に登録申請をした経緯は、ニュースレターNo.18(2002年7月22日発行)に記された通りですが、要は、

- (1) 科学者による学術研究団体であり
- (2) 3ヶ年を超える活動期間があり
- (3) 研究論文発表にあたり査読制度があること
- (4) 構成員数が、第4部(理学)300人、第5部(工学)500人、以上であること

などです。前回は、3年前(平成11年)に申請する機会があったのですが、本研究会は平成9年発足、会誌創刊が平成10年であり3ヶ年超の規定により申請できませんでした。したがって、3年に一度行われる学術研究団体登録は、今回が当研究会にとって初めてのチャンスだったのです。なお、構成員数の申請は、学生を除き、理学452名、工学532名、その他24名(無記名、医師、文化系等)の計1,008名でした。

平成9年10月15日に発足した応用生態工学研究会は、その具体的な発足準備をその年の春から始めていました。その準備に一環として、平成9年(1997)5月29日に、「応用生態工学研究会」及び「応用生態工学会」の二つの商標登録出願をしました(平成11年商標登録)。当時、生態工学・・・、応用生態学・・・、等々、いろいろな類似名の研究会・学会・研究所の名称が出始めていました。ある生物の先生からは、「商標登録までするとは驚いた」といった感想も出されましたが、同一名称による混乱を避けるためにも、いち早く「応用生態工学」の名称を登録し、しかも当面「研究会」、将来「学会」へと展開できる準備が必要でした。

学術研究団体としての登録をすること、「研究会」から「学会」に名称を改正することは別の問題です。将来構想委員会でも、「研究会」の名前を残したい(確立された体系のイメージのある「学会」よりも「研究会」のほうがふさわしい、等)、という意見が根強く主張されてきました(ニュースレターNo.18、19)。今回、公的な意味で学術研究団体として認められる意義は大きいこと、それ

に伴い名称も「応用生態工学会」とし、教授が学生に論文を発表させやすい等、として両者の実施決定に至ったと思います。

土木学会、日本生態学会、その他の既往の学会にしても、そこに構成員として参加して十分ならば、他の学会など必要ないはずですが、学会の閉鎖性、硬直性、巨大性、非社会性など、多くの学識者が問題点を指摘してきました。組織を形成して長年月を経ると、科学技術の進歩、社会的価値観の変化等に対応しきれず矛盾を抱えてしまいます。これは、「応用生態工学会」としてのこれから気を付けなければならない課題でもあります。

今、「応用生態工学会」にも課題があります。

- (1) 学識研究者ではない、公務員や民間技術者の研究発表が少ない。
- (2) 「生態学と土木工学」の共同研究がまだまだ少なく、その拡大にはかなりの努力が必要である。
- (3) 住民・市民等が発表できる体制が確立されていない。
- (4) 社会的(或は政治的)問題とされている土木公共事業にどのように対応するか、まだ不安定である。
- (5) 正会員、学生会員、賛助会員制度による会費でまかなう現行体制は近い将来改正する必要がある。
- (6) 同様に、事務局も自力で活動出来る体制確立が急務である。

等々。

これらは、多くの役員も研究会発足当初から指摘してきたことでありますが、時に流されること無く学会として対応すべき事項と考えます。

私は、応用生態工学研究会発足以来5ヶ年間、事務局代表及び事務局長として、2002年3月31日まで事務局に在籍しました。また、5月末の学術研究団体登録申請の事務作業までお手伝いさせていただきました。研究会を立ち上げ、学術研究団体登録の申請をし、そして「応用生態工学会」が誕生するまで立ち合わせていただけるなど、滅多に経験できるものではありません。廣瀬会長を初め、新旧役員の皆様、会員の皆様の御協力に感謝し、新事務局長の西浩司氏の今後の活躍に期待して報告としたいと思います。

### 3 学術研究団体登録と会誌「応用生態工学」の今後

会誌編集委員長 中村太士

先の年次大会でも報告のあったとおり、応用生態工学研究会が学術団体として認められ、応用生態工学会として新たなスタートをきりました。これによって学会誌となる「応用生態工学 (Ecology and Civil Engineering)」も更なる発展を期待されており、編集委員長としての責任も重くなったように感じます。

しかし一方で、まだまだ論文や事例研究、さらに意見などの投稿は少なく、未だに特集論文（多くは総説）によって年2回の発行が可能になっているのが実態です。応用生態工学会は、もともと社会的要請の中で成立した学会であり、大学や研究機関と同様な名前を冠した組織は存在しません。そのため基盤としては未だ脆弱であり、科学的方法論も確立していません。そのためには、より良い研究論文の確保が不可欠であり、会員の中でもとくに現場に携わっているコンサル関係者や地方事務所の行政官が、質の高い成果を発表できる環境を作って行きたいと考えています。

また、大学や研究機関での基盤を作るためには、応用生態工学分野で学位がとれるようにならなければなりません。特に社会人博士を輩出するために、そしてそのための業績づくりとして「応用生態工学」が役割を果たすことを期待しています。

学会誌「応用生態工学」は敷居が高い、と言われることがあります。これは質が高いという意味ならば良いのですが、科学的厳密さを求めるだけで現場ではあまり参考にならない、ということでは将来の発展がないように思われます。先の編集委員会でも、良い事例研究を事務所やコンサルに眠らせないように掘り起こす努力を、委員自らそして組織的に取り組むことが確認されました。もし、成果公表で悩んでおられる方がおられましたら、遠慮なく編集委員会にご連絡ください。できる限りの支援をしたいと思っております。

このように、未だ組織基盤の強くない応用生態工学ですが、だからこそ更なる発展を遂げられると

思っています。会員数も1,000人を越え、社会的要請と期待は強まるばかりです。先日、私の講座の事務官から、「一番多く外部から借りに来るのは、この応用生態工学ですよ」と言われ、にんまりしておりました。どうか、今後とも会員諸氏のお力で、この学会誌「応用生態工学」を自由に活気があり魅力的な雑誌にしていいただければ幸いです。私もそうした学会誌に育てられるように、微力をつくす所存です。よろしくお願い致します。

### 4 第6回大会報告

#### 1) 開催概要

第6回大会は、2002年(平成14年)10月5日(土)、10月6日(日)の2日間にわたり、東京北の丸公園の科学技術館サイエンスホールにおいて開催されました。

第6回大会の報告は、会誌「応用生態工学」の5巻2号に詳細を掲載しますので、このニュースレター19号では概略を報告します。

第6回総会には50名の正会員が出席し、2日間を通じて総計261名が大会に参加しました。

この第6回大会に前後して会誌編集委員会、理事会、幹事会が開催され、総会への提案事項の審議及び総会決定事項に関する確認等が行われました。

○第6回大会日程

#### 10月5日(土) - 1日目 -

- 11:00 ホール開場、受付開始
- 11:30 第6回総会
- 13:30 公開シンポジウム『生態学と工学の連携 - 総合流域管理に向けて -』
- 16:30 第6回研究発表会
- 16:30 ポスター発表者によるアピール  
(引き続きホールギャラリーにてポスター発表)
- 18:30 懇親会(同館B1レストラン)
- 20:00 1日目終了

#### 10月6日(日) - 2日目 -

- 09:00 ホール開場
- 09:15 第6回研究発表会(口頭発表)
- 16:30 閉会

## 【1】第6回総会

第6回総会の開催にあたっては、渡辺晋氏（国土環境株式会社）が総会議長に選出され、議事が進行されました。総会議事は以下のとおりです。

<報告事項>

(1)学術研究団体登録の報告

(2)一般経過報告

(3)会員状況報告

現在の会員数：(2002.9.30 現在)

正(学生)会員 1,103名

賛助会員 57法人(86口)

(4)会誌「応用生態工学」編集報告

(5)海外学会等への派遣について

(6)奨励研究申込み状況報告

<決議事項>

(1)平成12年度報告（事業・決算・監査報告）

(2)平成13年度報告（事業計画、予算）

(3)規約の改正

【規約改正の内容】

①研究会の名称を「応用生態工学会」とする

②事務局の部屋移転に伴う住所表示の変更

③理事会の構成人数について、現行規約の「10名以内」を「15名以内」に変更

各事項について決議採択が行われました。



総会の議事進行を行う渡辺議長

## 【2】公開シンポジウム『生態学と工学の連携－総合流域管理に向けて－』

Integrated River Basin Planning and Management: A Challenge for Collaboration among ecologists, engineers and regional planners

昨年度の「河川の自然復元の現状と課題」に続いて、河川整備基金の助成を受けた公開シンポジウムを開催しました。講演者は、オーストリア・ウィーン農業大学のハンス・ピーター・ナハトネーベル教授、京都大学防災研究所の竹門康弘助教授、独立行政法人土木研究所の尾澤卓思上席研究員で、総合討論は名古屋大学辻本哲郎教授を座長として行われました（同時通訳あり）。

講演内容は以下のとおりでした。

(1)総合流域計画と管理－生態学者・工学者・地域計画者の協働への取り組み－

**Integrated River Basin Planning and Management: A Challenge for Collaboration among ecologists, engineers and regional planners**

**Professor Hans-Peter Nachtnebel**(オーストリア・ウィーン農業大学教授)

(2)日本の河川における自然環境保全・復元のための生態学的課題

**Ecological Perspective of Nature Conservation and Restoration in Japanese Rivers**

竹門康弘（京都大学防災研究所助教授）

(3)河川技術者から見た土木工学と生態学の連携  
**Collaboration between Ecology and Civil Engineering: From a viewpoint of river engineers**  
尾澤卓思(独立行政法人土木研究所上席研究員)

## 【3】第6回研究発表会

第6回研究発表会では、前回に引き続きポスター発表（ホールギャラリー）11題と口頭発表25題の研究が発表されました。



公開シンポジウムで講演するナハトネーベル教授



総合討論での座長の辻本理事、パネラーのナハトネーベル教授、竹門幹事、尾澤氏



ポスター発表では熱心な議論が行われました

## 2) 第6回大会を終えて

大会実行委員長 高橋和也(応用地質株式会社)

学会への移行が初日の総会にて承認され、実質上、学会となって初の研究会となった第6回大会において、大会実行委員長という大役をおおせつかりました。会の運営に関し至らぬ点多々あったかと思いますが、実行委員の方々はもとより、皆様のおかげでなんとか大会が無事終了できましたこと、冒頭に、紙面をお借りしてお礼申し上げます。

10月5～6日の2日間の大会を、改めて振り返ってみます。シンポジウムは、オーストリアからナハト・ネーベル教授をお迎えし、オーストリアの **River Restoration** 等に関する貴重な講演をいただきました。立地特性や社会的背景こそ異なりますが、現在、我が国で進められている河川環境等自然回復への取り組みの方向性と相違ないことを確認することができました。自然再生推進法も今国会にて法制化される見込みですが、今後は、我が国の自然的・社会的環境に立脚した新たな方法論を模索していくことになるのだと思います。後日、ナハトネーベル教授より事務局宛てメールが届きましたが、今度は、オーストリアでのディスカッションを提案してくださっているようです。両国の技術交流がますます進み、かつ、お互いが独自のシステムを構築していくことが望まれます。

研究発表会の方は、第5回大会よりは、発表数は減りましたが、内容的にはこれまでと遜色のな

い、レベルの高いものであったと思われま。どなたか覚えていませんが、「発表内容が初期に比べて、ずいぶん洗練されてきたなあ」という感想を述べておられたのを耳にしました。これも会員各位が応用生態工学という新しい分野の構築にむけて、これまで努力されてこられた成果だと思えます。今大会でははじめて、ポスター・セッションを対象に表彰を行いました。これも、発表レベルや会そのものの発展に寄与していくものと思われま。

最後に、来年大会は、名実ともに学会としての初の大会となります。今大会では私が至らなかったために、いくつかの反省点が実行委員各位より寄せられています。これらの反省事項については、事務局等とおして、来年の実行委員へと引き継いでいきたいと思っています。



口頭発表でもいろいろな議論が交わされました

### 3) ポスター賞決まる!

ポスター賞選考委員長 角野康郎幹事長

応用生態工学研究会では、発表や研究を今後さらに奨励することをねらいとして、学会賞などを設けることが検討されてきましたが、まずはポスター賞(①一般投票部門、②選考委員会賞)を選ぶこととなりました。第6回研究発表会で初めて実施され、以下の2発表が選ばれました。

○一般投票部門:

**P-11.**「積雪寒冷地におけるサクラマス幼魚の越冬環境と河川構造～その創出に向けた事前調査結果から～」渡辺恵三(北海道技術コンサルタント)、中村太士(北海道大学)、越路雄祐(北海道札幌土木現業所)、北谷啓幸(リバーフロント整備センター)

次点: **P-2**

○選考委員会賞:

**P-8.**「オオナガレトビケラの微生物場所としての環境収容力と生息密度の関係」鶴石 達(岐阜連大信州大学)

次点: **P-2、P-3、P-5**

一般投票部門では、内容が目的から結論まで論旨が明快で、ポスターの完成度が高いことが票を集めた理由のようでした。

選考委員会賞は、研究内容がしっかりしていることもさることながら、発表者一人で頑張っていることが選考委員から評価されました。

しかし、一般投票部門、選考委員会賞とも有力候補が多く、僅差で決まったのが実情です。学術的な評価、解析手法の面白さ、興味深い結果、実際に役に立つ調査である、ポスターとしての美しさなどの観点から支持を集めていたものがほかにもありました。今後の奮起が期待されます。

一方で、投票者、選考委員から全体として以下のような意見も出ていますので、今後のポスター発表の参考としてください。

- ・面白い研究であるのに少々ポスターとしての完成度が足りない、反対にポスターとしては美しいが研究的な色彩が薄いものがあった。
- ・「はじめに」の書き方が足りないものが多い。研究の目的を明確にすべき。
- ・新しい研究内容が多く面白い。特にハビタットの階層性に関する取り組みと、この結果に基づく解析は新しい方向性であろう。



会長からポスター賞の表彰を受ける受賞者

### 4) 奨励研究と研究発表を終えて

平塚二郎(早稲田大学大学院理工学研究科)

私は応用生態工学研究会に学生会員として入会して2年目の若輩ですが、2001年度の奨励研究に幸運にも採択され、その研究課題である「河川護岸形状が水圏生物相および付着生物膜の活性に及ぼす影響に関する研究」を第6回研究発表会にて口頭発表させて頂きました。

私の研究対象は中小都市河川であり、土地利用の制約から河川形態を大幅に変えることが難しいということを前提に、人為的に修復(操作)可能なものである護岸に注目しています。実験水路を用いた今回のケースでは、護岸構造を複雑にすることは河川生態系ならびに水質にとって望ましいという結果になりましたが、流速の遅い場合や汚濁負荷の高い場合は堆積物からの栄養塩類などの溶出による環境悪化が懸念されるため、今後はこういった条件での検討を行っていこうと考えております。

研究発表会は立派な会場で催され、雰囲気は飲まれそうなくらい緊張してこともあり、進行に迷惑をかけないようにとつい早口になっているのが自分でも感じられました。これまでは主に土木工学の範疇で議論をしておりましたので、生態学の観点からのコメントも頂くことができ、大変貴重な経験になりました。

末筆になりますが、奨励研究の遂行と研究成果の発表のために色々とお力添え賜りました西事務局長ならびに熊野前事務局長に厚く御礼申し上げます。

## 5 理事会・幹事会報告

2002年10月5日(土)に第19回理事会、第20回幹事会を開催しました。以下、主要事項の報告を行います。

### 第20回幹事会

開催月日:2002年10月5日(土)12:30~13:00

会場:科学技術館第二会議室

出席:角野、清水、高橋、竹門、中村、古川、森、遊磨(事務局西)

### 第19回理事会

開催月日:2002年10月5日(土)9:00~11:00

会場:科学技術館第二会議室

出席:廣瀬、山岸、小倉、玉井、石川、池淵、井上、小林、谷田、辻本、鷺谷、角野、(事務局西)

1. 学術研究団体登録(研究連絡委員会推薦人/候補者の選定について)

・推薦人/候補者をどうやって選ぶかを決めておく必要がある。

・これまで研連委員になっている方をお願いするのが現実的である。

・4部(理学)は鷺谷理事にお願いし、5部(工学)については玉井副会長に候補を推薦していただくこととする。

2. 審議事項

1) 理事の人数に関する現在の規約を10名以内から15名以内に規約を改正することを総会に提案する。

2) 次期役員を選出方法について

・役員を選出について透明性を確保するために、役員選出制度をまず固め、それに基づいて今後役員候補を会員に示すなどして、総会で選出していただくこととする。役員選出制度検討委員会を設置するが、委員については会長に人選を一任する。

3) 名誉会員の選出

・来年度の理事会で候補となる方に意向を確認し、理事会で推薦し総会で承認を受けることとする。特に規約は改正せず今後も運用で適宜対応する。

4) 韓国とのジョイント事業

・自発的な活動は勧めるが、今回(15年度)の

行事については予算の問題などもあり、学会は「後援」という立場をとることとする。

・交流委員会で、今後どのように対応するか議論を開始し、交流委員会として理事会に答申するようにする。

・交流委員会を中心に、このような動きの際に必要な英文パンフや規約の英文化について作業を進めることとする。

・今回のような交流の芽は大事にし、これからもアジアを視野に学会の活動を広げていくことを目指す。

5) 用語集・基礎講座等の出版

・これまで蓄積された財産である「基礎講座」の記録などをわかりやすくリライトすることで出版に持っていくことは可能だろう。

・普及委員会に企画編集委員会を立ち上げていただくなど推進をお願いしたい。

・企画編集委員会では、印税、学会名で出すのか著者名で出すのかなどcopyrightの問題や路線(生態学者のための工学・工学者のための生態学など)を検討・企画してもらおう。技術セミナー的なものか、一般読み物なのかなども検討する。不定期のシリーズ物にしてもよいだろう。

・用語集は、各種学会からも出ているのでメリットはあまりなく、見送る方針とする。

6) 海外派遣(交流委員会)

・今後は対象を特定して、特に若手を派遣するなど戦略的に運用していったらどうか。

・今年度無理にこの費用を使うことはない。プールしておけばよい。

7) 奨励研究(研究開発委員)

・海外派遣費と同様に無理にこの費用を使う必要はない。

・PR不足ではないか。HP,メールなどを使って年齢層、職種など該当する会員層に直接応募を募るPRをしてもいいのではないか。もっとPRすれば、学生会員を増やす方策としても有効だろう。

・募集期間を考えて使いやすくして欲しい。交流委員会に検討していただきたい。

8) 2003年度海外招聘(オーストラリア)

・「沿岸」「自然再生と協働」のようなテーマで國井理事に招聘のコーディネイトをお願いする。橘川前副会長に相談しながら進めてもらいたい。

・オーストラリア関係で考えられるテーマとして

は、外来種・絶滅危惧種・貴重種の取り扱いなどもよいかも知れない。

・生態学的事実だけでなく、工学とのつながりも考慮していただきたい。

#### 9) 新五ヵ年計画

・新しい計画の前に、これまでの計画の最終評価を各委員会から報告を出してもらう必要がある。

その上で委員会の再編・統合を検討する。

・各委員会で自己評価した後、報告を将来構想委員会に提出し、将来構想委員会から理事会に答申してもらおうという流れにする。その後幹事会で具体的内容を固める作業があるかも知れない。

・会長から各委員会委員長にこのような方針でお願いする。

・来年の総会で総括・新計画が掛けられるようにスケジュールを調整する。

・新規の事業を起こすことはそうないだろう。これまでのことを充実させることではないか。

・計画の期間については、会長・幹事長の任期に合わせるほうが素直ではないか。

・委員会とは異なる部分、例えば「学会になった」ことなど学会全体に関することは理事会で自己評価する。

・「中期計画」と名称をかえればよい。

## 6 会誌編集委員会報告

開催月日：2002年10月4日(金) 19:30~21:00

会場：麴町会議室

出席：中村、浅枝、池内、鎌田、大野、清水、竹門、森、(事務局西)

### 1. 現状と課題

・「意見」への投稿は少ないが事例研究は少しずつ増えてきている。

・特集が多いことも関係するが、査読に要する時間(平均200日以上)が長くなっている。なんとか短縮したい。

・論文投稿数はコンサルタントからのものは増えていない。

・投稿テーマが河川に偏りすぎている。対象とする生物も魚類・植物が多い。

・投稿状況からみて、刊行数を増やす(季刊化する)のはしばらく無理であろう。

### 2. 各課題への対応について

#### 1) 査読期間の短縮

・コンサルタントや役所の人を書く場合を想定し、「例」や「見本」となるものを用意することを検討する。

・大幅な修正が必要と思われるものは、再投稿(査読継続)よりも「新規」の扱いにする。

・担当編集者から査読者への「催促」の頻度を増やすよう務める。

#### 2) 論文投稿数の増加(特にコンサルタントからの投稿)

・研究者が投稿をサポートしてあげる体制の整備を検討する。研究発表会で見た面白い研究を論文まで引き上げる方法を考えたい。

・行政実務者・コンサルタントなどに働きかけて投稿を促すような方策・宣伝方法を検討する。

・論文として出せそうな事例の情報を集める方法を考えることが必要。会の役員の協力も仰ぐ。

・特集号で、あまりこれまで取り上げていない河川以外の分野(景観生態学など)を取り上げることで、投稿の呼び水とすることを検討する。

・「意見」に関しては、テーマによっては執筆を依頼(各種の委員会を感じたことなど)することも検討する。

・2001年度に実施したリサーチマネジメントをアシストする勉強会のような場から、途中で研究者が研究に加わって投稿にこぎつけた例がある。

・現地の事例報告では、面白そうなデータ・調査研究には周辺の研究者と一緒にやって欲しいと依頼するようなことが必要だろう。

・順応的管理をやるならばその業務報告は論文を書くのと同じだとの意識が必要ではないか。

・将来的には論文投稿ができるくらいの能力のあるコンサルタントが評価されるような業務の実施体制が望ましい。(プロポーザルの評価)。

・予測・評価などをテーマとした論文が増えていくことが望ましい。

・今後は業務の計画段階から研究者に関わってもらうことが必要だろう。結果的に論文投稿にもつながっていく。

・データが事務所に埋もれてしまうのがもったいない。生かす方法、共通利用する方法を考えなく

てはならない。

・論文投稿までいけそうな情報のスクリーニングの台に載せる方法として、まず各種委員会でめばしいものを拾うことはできるが、研究者の目の届かないものをどう拾うのが問題である。

・各種技術発表会などで取り上げられたものから探すことも検討する。

・コンサルタントが小間使いではなく、本来の技術提案業務ができるようになれば、論文はたくさん出てくるはずであると思う。

・年1回の拡大編集委員会を今後企画する。

### 3) 今後の予定等

・5巻2号は自然再生特集（場合によっては特集なし）の予定。

・6巻1号の外来種特集は、10/3に執筆者の了解をもらって動き出した。

・日韓交流などを考え、英語の投稿フォーマットや規程を作っておく必要がある。

・将来的には、国際誌として東アジア地域の英文ジャーナルを作った方がよいのではないか。他の学会の動向を参考にする。

・6巻2号予定の **Intecol** 特集では、韓国の事情がわかるような記事を別途依頼中である。特集タイトルは受理された論文に応じて再検討する。

### 4) 英語論文

・英語論文に和文の概要をつける事についての規程などについて今後検討する。

・英文校閲の費用について、プロや留学生に依頼するケースも含め今後検討する。

### 5) 特集の企画

・テーマとして、道路・都市計画（景観生態学的な事例）、林学、ツールとしてのモデル、水質、分子生物学、ため池、貴重種／個体群、過去の景観をリファレンスとする方法、計測技術などが挙げられる。

・森委員を責任者にして貴重種特集を企画することにする。

・農業基本法に環境が入ったので、この辺を取り上げた特集を考えてもらってもよいだろう。担当編集者は会誌編集委員でなくてもよいのではないか。

## 7 地域だより

### 1) 応用生態工学・札幌から

松本伸之

『応用生態工学』を『応用生態』と略して話すことを私は良くやります。そして、あ、この話し方だと『工学』が抜けてしまい、本学会の趣旨をキチンと伝えられないかと反省しています。今回の投稿から、応用生態工学研究会が学会へ改称されました。事務局をサポートするものとして何か気が引き締まる思いがします。

さて、『応用生態工学会・札幌』（以下、『札幌』）の近況をお知らせします。以前にもお知らせしましたが、『札幌』では机上の勉強会を幾ら繰り返しても『応用生態工学』の確立に結びつかないのではないかという疑問から出発し、仮説・調査・実践・検証するという作業を繰り返すことをフゴッペ川で行っています（フゴッペ・プロジェクト）。代表は北大の中村太士さんです。

このプロジェクトは『札幌』の自主研究です。始める際、札幌在住の応用生態工学会員と話し合い、応用生態工学の考え方をより多くの方と検証するために、会員外のメンバーや「様子見会員」も自由に参加できる形にしました。プロジェクトは各参加者の完全自腹で行っています。その他、会議室代などの活動費は会員・会員外の方から都度平等に徴集しています。飲み会費が余ったり幸運にも恵まれて、赤字にはなっていません。活動は完全にボランティアでおこなっているので、普段はメーリングリストでのやり取りを中心に行っています。メーリングリストへは、現在79名が登録しています。

プロジェクトは、フィールドが札幌から遠いこともあり、なかなか当初のスケジュールで進んでいません。今年の9月には全体の進行状況を勘案して、以下の様にプロジェクトを修正することが決まりました。また、この11月末頃には、プロジェクトについてフゴッペ川の河川管理者と合同の勉強会が開かれる予定です。

#### ○フゴッペ・プロジェクト

1) 全体のボトムライン(流路スケール=縦断方向のボトムライン)

1-1 治水安全度を確保する。

(改修計画案の確率  $N = 1/30$ , 計画高水流量  $Q = 140 \text{ m}^3/\text{s}$ )

- 1-2 魚類の連続性を確保する。
- 1-3 物質(流砂)の連続性を確保する。
- 1-4 河床の攪乱を確保する(帯工等の縦断規制工法は攪乱をも規制する)
- 1-5 河道内樹木を確保する。
- 2) 部分のボトムライン(瀬淵スケール=横断方向のボトムライン)
  - 2-1 河岸沿いの淵を確保する。(水衝部の河岸オーバーハング構造の創出も考慮する)
  - 2-2 礫河床の保全(岩盤河床を礫河床に)
  - 2-3 抽水植物の保全(下流部)
  - 2-4 改修工事開始まで落差部(落差工 1 基、堰 1 基)への仮魚道設置
- 3) ボトムラインに沿った仮説検証のシナリオを描きながら本調査の段取り

- ・今年度の本調査は残された期間で有効な調査項目について、下記の仮説A・B・Cを対象とする。
- 仮説A 簡易斜路魚道を設置したら、他の魚道よりも遡上する魚種・個体数が増え、他の魚道よりも遡上効果が高い(→魚道そのものの仮説)。
- 仮説B 岩床上の礫は移動しやすいが、増水時に緩流ゾーンを創出すると、その礫は移動しづらい。
- 仮説C 直壁の逆直角三角形もしくはオーバーハング(ひさし)になっている河岸は深い淵が形成され、水生動物の良い生息場、越冬場となっている。オーバーハングのカバーは冬季に積雪で押しつぶされ水没する。このことは魚類にとって最適の越冬場が確保されたことになる。
- ・仮説A・B・Cを検証するには操作実験(野外実験)の必要がある。
- ・河川管理者に操作実験(野外実験)の必要性を説明し実験施設設置の打診を行う。

## 2)東京だより - 第4回東京湾海洋環境シンポジウム開催 -

派遣委員 渡辺晋(国土環境株式会社)

今年度も表記シンポジウムを開催することになりましたので、派遣委員より会員の皆様に御連絡いたします。このシンポジウムは多数の学会から1名ずつ派遣されたメンバーで実行委員会を作り

開催しているもので、応用生態工学会としては第3回から正式に参加しています。これまでのシンポジウムの結果はとりまとめて公表しており、下記の通りです。

- 第1回(1996.11.28)「東京湾研究の歴史」:  
海洋と生物 1997年第19巻第2号
- 第2回(1998.12.7)「貧酸素水塊—その形成過程・挙動・影響そして対策—」:  
月刊海洋 1999年第31巻8号
- 第3回(2000.12.8)「沿岸埋立と市民生活」:  
月刊海洋 2001年第33巻第12号

事前の参加申し込みなどは不用で、どなたでも自由に参加できます。会員割り引きも何もありません。以下にプログラムを示しますが、内容は多少変更になる可能性があります。その場合は御容赦下さい。

### 『第4回東京湾海洋環境シンポジウム』 [東京湾環境回復の目標と課題]

日時: 2003年1月16日(木) 10:30~17:30  
会場: 東京大学海洋研究所講堂(B棟1階)  
交通: 詳細はホームページにて確認してください。  
<http://www.ori.u-tokyo.ac.jp./japanese/index.html>

主催: 東京湾海洋環境シンポジウム実行委員会  
参加費: 無料 要旨集: 1000円  
懇親会費: 3000円  
開催主旨:

東京湾は環境回復を必要とする日本を代表する内湾である。東京湾の環境回復には、分野横断的な学会協調のみならず、研究者・行政・市民が共に解決策を考え、実行していかなければならない。本シンポジウム実行委員は、第1回で東京湾の生態系と環境の変遷を回顧した。第2回では海底層に形成する貧酸素水塊、第3回では沿岸埋立といった各論的テーマを扱ってきた。今回は東京湾の環境修復を目指す包括的な方向性を模索するための具体的回復目標を提出したいと考えている。

プログラム:  
10:30 開会の挨拶 清水 誠(委員長)  
10:35 「貧酸素水塊の解消を前提とした水質の回復目標」野村秀明(東京大学海洋研究所)・松村剛(財団法人愛知県水産振興基金)

11:05 「底生生物から見た環境回復目標」風呂田利夫(東邦大学東京湾生態系研究センター)  
 11:35 「漁業資源から見た環境回復目標」清水誠(東京大学名誉教授)  
 12:05 昼休み  
 13:00 「海と人の関わりの回復と今後の展開」中村俊彦(千葉県立中央博物館)  
 13:30 「ボトムアップ型の環境回復とその課題ー市民・漁業者の視点から」工藤孝浩(神奈川県水産総合研究所)  
 14:00 「物理学的側面から見た水環境の現状と回復課題」磯部雅彦(東京大学大学院)  
 14:30 「港湾事業における環境修復への取り組み」古川恵太(国土交通省国土技術政策総合研究所)  
 15:00 「都市が東京湾に与える影響ー水・熱輸送の視点からー」木内 豪(独立行政法人土木研究所)  
 15:30 休憩  
 15:40 「パネル討論:東京湾の環境修復における回復目標」座長:清水 誠(委員長)パネリスト:講演者全員  
 17:30 懇親会  
 共催学会・団体:応用生態工学会、水産海洋学会、東京湾学会、土木学会海岸工学委員会、日仏海洋学会、日本海洋学会、日本海洋学会沿岸海洋研究部会、日本環境学会、日本気象学会、日本魚類学会、日本水産学会、日本水産工学会、日本生態学会、日本地球化学会、日本付着生物学会、日本プランクトン学会、日本ベントス学会、日本水環境学会、日本陸水学会(アイウエオ順)  
 協力団体:横浜市立大学  
 問い合わせ先:第4回東京湾海洋環境シンポジウム実行委員会事務局

〒164-8639 東京都中野区南台1-15-1 東京大学海洋研究所 野村英明

e-mail [nmr@ori.u-tokyo.ac.jp](mailto:nmr@ori.u-tokyo.ac.jp)

tel 03-5351-6483 fax 03-5351-6482

\*\*\*\*\*

もともこの実行委員会では、最終的に東京湾の環境再生に向けた提言をしたいと考えており、今回の第4回シンポジウムの後は、提言に向けた検討を始める予定です。

現在、自然再生、都市再生ブームになっており、

東京湾流域では様々な機関が再生事業を計画、実施しています。しかし、1つの大きな目標があつて、それに向かって役割分担をしているようには思えず、各機関が独自でばらばらに動いているようにも思えますし、その中には相反するようなものまでみられます。

そこで、この学会連合では、多くの学会の知識を1つにまとめて、東京湾流域全体を視野に入れて、最終的には東京湾の環境を修復するための提起をしたいと考えており、そのための1つとして、東京湾および湾流域の環境を統一的に監視・研究するための東京湾研究所の設立も提言していこうとしています。

ただし、その提言内容については、共催学会がすべて賛同するとは限らないため、各学会とこの実行委員会提言の関係をどうするかといったことも検討を始めています。また、学会連合は、自然環境(水質等も含む)については強いですが、人間活動すなわち都市、経済、法律といった社会経済的な分野には若干弱いような印象があります。将来の人の生活も十分に考慮したものでないと、よい目標が立てられず、今のところは、個別の目標設定(たとえば水産の分野からみた目標)にしかかかっていません。課題は多いですが、じっくり考えていきたいと思ひます。

興味のある方は、シンポジウムに御参加下さい。

## 8 いろいろなニュース

### 1) 韓国 日本交流報告(2002年8月)

竹門康弘(京都大学防災)

鎌田磨人(徳島大学工学部)

#### 1. はじめに

さる8月15日にソウルにて、INTECOL(国際生態学会)のシンポジウム「東アジアの河川における生態工学」が日韓共同で開催された(Organizers; Dr. M. Kamada, Dr. Y. Takemon & Dr. H-S. Woo). その後、このシンポジウムの韓国側オーガナイザーであった、韓国建設技術研究所(Korea Institute of Construction Technology: KICT, 日本の土木研究所に類似の機関で、職員数120名、うち博士20名)の水資源環境研究部長であるHyo-Seop Woo博士の御好意により、同シンポ

ジウムの日本人参加者を河川の視察とセミナーに招待していただいた。まず、16日にソウル市内の都市河川における自然復元事業の現場を視察した後、KICTを訪問して竹門と鎌田が日本の応用生態工学の現状について話題提供した。次いで、KICTの職員と今後の応用生態工学分野における日韓交流の可能性について議論した。また、17日には漢江上中流域の視察旅行もお世話いただいた。ここでは、両日における話し合いの結果を中心に報告する。今回の議論については、応用生態工学研究会交流委員会における今後の取り組みの参考にしていただければ幸いである。

## 2. 交流経緯と参加者

INTECOLのシンポジウム「東アジアの河川における生態工学」にHyo-Seop Woo博士がコーディネーターとして参画されたことは、INTECOL事務局の取りはからいであり、当初我々はWoo博士を知らなかった。しかし、7月初めに釜山大学生物科学部のTae-Soo Chon教授から博士が河川生態復元研究会を主宰されていることを聞き及び、急遽、Hyo-Seop Woo博士との会談ならびに研究所の手掛ける復元事業の現場視察をお願いした。その結果、日程が迫っていたにもかかわらず、迅速にセミナーや視察を企画し実現していただいた。ソウルでの交流スケジュールと参加者は、以下の通りであった。

8月16日(金) 午前 ソウル市内の良才川(ヤンゼジョン)視察

午後 KICTにてセミナー開催

応用生態工学分野における日韓交流について話し合い

夜 KICTの近くで夕食(KICT主催)

参加者：鎌田磨人(徳島大工)、竹門康弘(京大防災研)、山田浩之(北大農)、岩田智也(京大生態研)、Dr. Hong-Kyu Ahn(KICT)、Dr. Yu-Dae Yung(KICT)、Dr. Jin-Hong Kim(韓国中央大工)、Dr. Chang-Suk Lee(Seoul Women's Univ. 環境生命科学; 視察のみ)、Dr. Hyo-Seop Woo(KICT; セミナー以降のみ)、Dr. Sam-Hee Lee(KICT; セミナー以降のみ)、なおセミナーには、Dr. Jong-Min Oh(韓国科学技術研究所)、Dr. Jae-Choon Lee(韓国建設交通部漢江洪水統制所

長)他数名が参加した。

8月17日(土) 午前 八堂(パルタン)ダム、湿地保全地区視察

福河川(ボックハジョン)

の近自然河川工区視察

午後 南漢江の忠州(チュンジュ)付近視察

参加者：鎌田夫妻、竹門、山田、Dr. Ahn, Dr. Yung

## 4. 視察報告

ソウルの都心部で漢江に注ぐ良才川(ヤンゼジョン)は、水質は相当に富栄養化し切り立った堤防で囲われているものの、大都市の河川としては比較的自然的な河床地形を復元させる余地がありそうに思われた(図1)。ここでは、日本でお馴染みのビオトープ指向の人工ワンドや河床材を用いた水質浄化装置などを見学した(図2)。

また、南漢江支流の福河川(ボックハジョン)では、近自然河川工法による河川生態復元事業が行われていた。低水路の蛇行化や巨石を組んだ水制などの手法は日本で見られたものであったが、7・8月に韓半島に接近・上陸した台風によって大きな攪乱を受け各所で侵食や土砂堆積が起きた結果、事業の目論見以上に自然的な河床景観をみることができた(図3)。ここで、AhnさんらKICTのメンバーが事業の事前事後調査を熱心に行っていることが印象深かった。その後、9月1日の台風15号で再び大きな河床変動を起こしたはずであり、期せずして大規模な攪乱の事前事後の比較研究になるかもしれない。

いっぽう、漢江本流の八堂(パルタン)ダム(図4)は、流量調節能力が高いためか、湛水域の水位が極めて安定しており、結果的に沿岸の水生物群落が豊かに発達している(図5)。こうした景観がみられるのは、日本の急峻な山岳地域のダム湖とは異なり、水没地域に比較的平坦な地域が含まれているためであろう。湾奥部では広大なハス群落が広がっており、そこでは蓮の種子を集めて美しいネックレスをつくっている夫婦に出会った。

## 5. KICT Meetingにおける提案と合意事項

8月16日にはKICTを訪問し、応用生態工学分

野における将来の日韓協同の可能性について意見交換した。Dr. Hyo-Seop Woo は、韓国では工学と生態学の連繋が日本ほど進んでおらず、まずは生態学と工学の研究協力を促進し、この分野の研究者を組織化していくことが必要であるとの意見であった。KICT では、同目的の既存の組織である河川生態復元研究会（大学研究者3割、KICT職員などの行政3割、民間3割を合せて現在40人規模の団体で2年前に結成された）を母体として全国組織まで発展させていくとのことであった。

また、非公式ながら、これを機会に International Joint Symposium を日本と韓国で毎年交互に開催する案について賛同が得られた。この案については、今後本学会の交流委員会で具体化を進めていただければ幸いである。いっぽう、2003年には徳島大学工学部（主催者：岡部・鎌田）において先駆けの Joint Symposium を開催する計画を立てているところである。この計画は現在のところ予算的裏付けがないため、開催規模については未定であるが、特に近郊の方には多数の御参加を期待している。



台風による増水で攪乱を受けた福河川近自然河川工法区間。



放水する八堂（パルタン）ダム



良才川下流の景観



水生植物群落の発達したダム湖畔



ソウル郊外の良才川中流にて生態機能復元事業の説明を受けるメンバー。

## 2) フォーラムの開催 (in 松江) パートナーシップ委員会

パートナーシップ委員会では、「自然再生事業と市民活動 -霞ヶ浦・琵琶湖・宍道湖・中海-」と題したフォーラムを開催しました。概要は下記のとおりです。

○11月2日(土)

13:30-18:00 現地見学会 (宍道湖西岸植生護

岸工事現場、宍道湖自然館「ゴビウス」など)

18:30-21:00交流会

○11月3日(日)

9:00-12:00 フォーラム(会場:松江テルサ)

司会: 國井秀伸(島根大学汽水域研究センター、当研究会理事)

霞ヶ浦: 「霞ヶ浦・北浦をよくする市民連絡会議」事務局長 飯島博氏

琵琶湖: 「びわ湖自然環境ネットワーク」代表 寺川庄蔵氏

宍道湖・中海: 「斐伊川流域環境ネットワーク」代表 飯田幸一氏

13:30-16:00 討論(講演者、パートナーシップ委員および会場)

### 3)北陸初開催!現地ワークショップ「北陸の水辺を考える」

交流委員会・ワークショップ実行委員会

応用生態工学会では、来る2002年1月25日、26日に石川県金沢市にて北陸初のワークショップを開催します。

期日:2003年1月25日(土)現地見学会

2003年1月26日(日)ワークショップ

場所:金沢市中央公民館(本多町館)および金沢周辺

案内やホームページで内容ご確認の上、奮ってお申し込みください。

### 4)長良川特集を読むシンポジウム開催!

会誌5巻1号の特集「長良川河口堰の影響に関するモニタリング評価」を題材にした公開シンポジウムを下記のとおり企画しています。

行事名:公開シンポジウム「長良川河口堰の影響に関するモニタリング評価—応用生態工学特集を読む」

日時:2003年2月7日(金)

会場:名古屋市桜華会館

案内やホームページで内容ご確認の上、奮ってお申し込みください。

### 5)国際トビケラ目シンポジウム詳報

- 会議案内と登録のお願い -

シンポジウム実行委員会

21世紀最初の第11回国際トビケラ目(毛翅目;昆虫)シンポジウムが2003年6月に、日本で開催されます。この国際シンポジウムは、参加人数こそ150名程度と、規模は大きくありませんが、欧州、北米、アジア、オセアニア、アフリカ、南米から、20ヶ国以上の参加があり、その紀要(プロシーディング)も非常に引用率の高い文献となっています。また、適正な規模であるため、内外の研究者などと親しく議論ができる場となっています。

アジアでは、1999年1月のタイ・チェンマイの第9回シンポジウムに続く2回目の開催となります。シンポジウムは、大阪府堺市の大阪府立大学の学術交流会館と、滋賀県朽木村を会場に開催されます。2003年6月12日の堺市内ホテルでの非公式な歓迎会で始まり、13日から16日までの4日間は、学術交流会館を会場にし口頭及びポスター発表と会議(Business Meetings)を行い、17日には京都市内を経由して朽木村に観光バスで移動します。18日には朽木村とその周辺で、トビケラなど水生昆虫の公開観察会、エクスカージョンなどを実施します。JR京都駅にて19日午前に解散する予定です。

【プログラム(予定)】

12日 非公式歓迎会(堺市内ホテルで夕方から開催予定)

13日から16日 口頭発表及びポスター発表;レセプション(大阪府立大学学術交流会館にて)。13-15日の夕方には、交流会場なども準備します。

17日 堺市から朽木村へ移動(京都市内観光;観

光バス利用)

18日 朽木村にて公開観察会(河川性水生昆虫及びエクスカージョン(琵琶湖及び周辺を予定))

19日 バス移動にてJR京都駅にて解散

13日~16日については、同伴者のためのプログラム(大阪、奈良、京都などの観光など)を準備します。

大阪府立大学会場への交通についてはホームページ：[www.osakafu-u.ac.jp](http://www.osakafu-u.ac.jp)で確認してください。

### 【宿泊】

堺市内(12日~17日)では、ホテルサンルート堺をメインホテルに予定しています。会期中は、このシンポジウムのために貸し切りの予定です。また、宿泊費についても、シングルルーム 6,000円(1泊)、ツインルーム 11,000円の、特別割引になっています(国内は先着順で、おおよそ60名程度を予定)。宿泊申込は登録用紙あるいはホームページ(近日開設予定)でお願いします。なお他の堺市内のホテルの宿泊となることもあることをご了承ください。宿泊料金などは、チェックアウト時に各自でお支払い下さい。大部分のクレジットカードも利用できます。ホテルと会場の間には、朝夕にはシャトルバスを用意します。堺市内あるいは大阪市内の他のホテルも利用できますが、その場合は各自で直接申し込んで下さい。

朽木村での宿泊は、グリーンパーク 思い出の森のロッジとホテルを利用します。(〒520-14 滋賀県高島郡朽木村大字柏 341-3. TEL 0740-38-2770; FAX 0740-38-2785) 宿泊などの予約は、主催者のほうでまとめて行いますので、これも登録用紙で申し込んでください(移動バス代・食事など込みの参加費:1名あたり 20,000円)。朽木村会場に直接来られる方は、交通などについては、朽木村のホームページ(<http://www.kutsuki.or.jp/>)をご覧ください。

現地では、安曇川とその支流での採集会と琵琶湖へのエクスカージョンとの、2つのコースを準備

しております。安曇川での採集会は、現地の生徒や一般参加者と合同の観察採集会を企画しています。海外からの参加者と現地参加者とのインタープリターをして頂ける方も募集しています。

【主催】国際トビケラシンポジウム実行委員会

【コンビナー】谷田一三(大阪府立大学総合科学部)

【後援】(順不同)

大阪府立大学(予定)、堺市(予定)、朽木村、日本昆虫学会、日本生態学会、日本陸水学会、応用生態工学会、

【賛助団体】(順不同)

河川環境管理財団、ダム水源地環境整備センター、リバーフロント整備センター、水資源開発公団、(有)コスモ理研、(株)野生生物総合研究所、(株)建設環境研究所、(株)北海道技術コンサルタント、(株)四電技術コンサルタント、(株)ウエスコ、環境設計(株)、建設技術研究所、国土環境(株)、応用地質(株)、(株)環境アセスメントセンター、(株)建設企画コンサルタント

## 6) 国際集会の案内

理事 谷田一三(大阪府立大学総合科学部)

「第9回河川研究と応用に関する国際会議(旧制御河川国際シンポジウム)」

Ninth International Conference on River Research and Applications

前回はフランスのツールーズでEISOR(Eighth Internatinal Symposium on Regulated Rivers)として開催された国際会議が、第9回の今回はオーストラリア、ニューサウスウェールズのオルベリーにおいて、2003年7月6-11日に開催される。前回の会議には、本学会からの派遣研究員も含めて多数の日本人の参加があり、日本の河川研究の存在感を示すとともに、参加者は会議からも多くのものを学んだ。

今回の会議の名称変更は、関連雑誌の誌名変更に伴うもので、今回はさらに視野を広げた会議となると思われる。

メインテーマは「河川システムの変動特性(The

Nature of Variability in River Systems)]で、これも時宜をえたテーマと思われる。詳細については、下記のホームページを参照されたい。論文応募が始まっており、要旨の締切は2003年1月末である。

<http://www.conlog.com.au/nisors>

ちなみに、オルベリーはオーストラリアの大河であるマーレー川の上流の都市であり、淡水生態系の共同研究センターもある。静かな田園都市を楽しむことができる。

## 7) 研究公募のお知らせ

幹事 島谷幸弘 (国土交通省武雄工事事務所)

「アザメの瀬は、松浦川の15k付近の右岸に位置する約6haの地区です。国土交通省九州地方整備局武雄工事事務所では、平成14年度よりアザメの瀬地区を対象に氾濫原的な後背湿地を再生する自然再生に着手しました。

自然再生事業では、科学的なデータに基づき事業を評価し、段階的に事業を進めるアダプティブ・マネージメントの手法を採用することになっています。アザメの瀬においても科学的なデータに基づき、それを評価し事業に反映させる予定です。

そこで、武雄工事事務所では、アダプティブ・マネージメントの一貫としてアザメの瀬—自然再生事業の評価に関する研究を受託研究が受け入れ可能な大学等を対象に公募します。詳細は武雄工事事務所のホームページ(下記)をご覧ください。

<http://www.qsr.mlit.go.jp/takeo/menu.htm>

## 9. 事務局から

10月の第6回総会で、会の名称が応用生態工学会となって初めてのニュースレターです。名称変更、学術研究団体登録などの重要なお知らせがあるためもっと早くお届けする予定でしたが、本日になってしまいました。

これから事務局でも学会にふさわしい活動を企画、実行していきたいと思っておりますので、会員の皆様のご協力をお願いいたします。また、ご意見、ご要望をぜひお寄せください。

さて、先日メールアドレスを事務局にお知らせいただいている方へ、フォーラムのお知らせなどを発信いたしました。その際にBCC発信としなかったため、一部の方のアドレスが他の会員の方から見えてしまうこととなってしまいました。ここで重ねてお詫び申し上げます。

事務局からのメールによるお知らせを希望されない方は、お手数ですがその旨事務局までお知らせください。また、メールアドレスが入会時とは変わったなどして届かなかった方も多数おられました。そのような方のうち、事務局からのメールによるお知らせを希望される方は、正しいアドレスを事務局までご連絡ください。

なお、会員相互の連絡などにご利用いただけるメーリングリストについては現在開設準備を進めています。こちらについては会員以外にも開放しますので、ご希望の方のみ登録させていただく予定です。準備ができ次第お知らせしますので、もうしばらくお待ちください。

[2002年12月1日現在会員数]

正(学生)会員	1,110名
賛助会員	58法人

## 応用生態工学会事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5 第七麹町ビル(2F 25号室)

TEL. 03-5216-8401 FAX. 03-5216-8520

E-mail: see @ blue.ocn.ne.jp ホームページ: <http://www.ecesj.com/>

[地下鉄有楽町線麹町駅2番出口徒歩3分]

[地下鉄半蔵門線半蔵門駅徒歩7分]

[JR中央線四ツ谷駅徒歩10分]